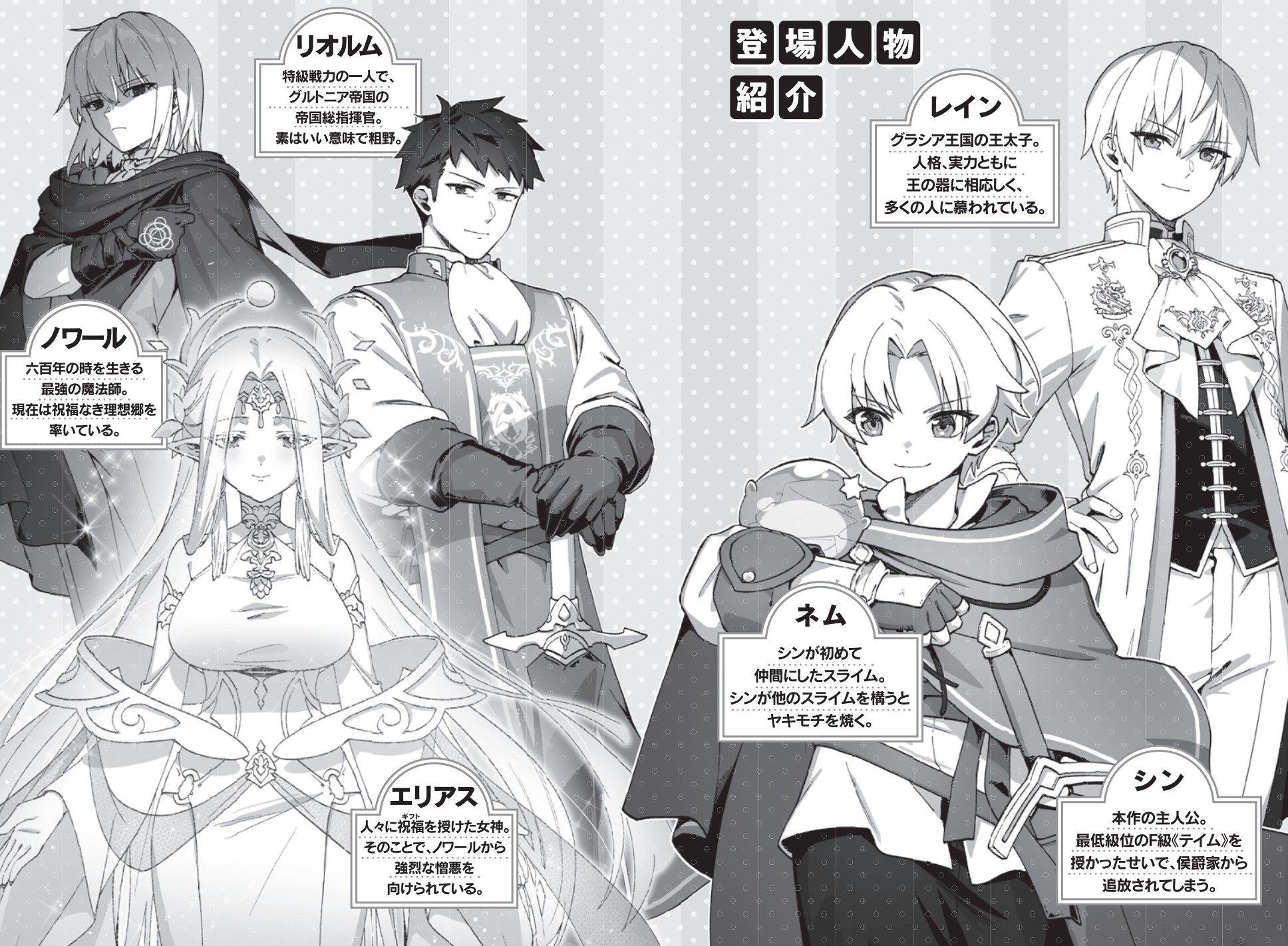
F級テイマーは
数の暴力で
世界を裏から
支配する
3
ゆーき
yu-ki
Illust. さかなへん

登場人物紹介


リオルム
特級戦力の一人で、グルトニア帝国の帝国総指揮官。素はいい意味で粗野。
レイン
グラシア王国の王太子。人格、実力ともに王の器に相応しく、多くの人に慕われている。
ノワール
六百年の時を生きる最強の魔法師。現在は祝福なき理想郷を率いている。
ネム
シンが初めて仲間にしたスライム。シンが他のスライムを構うとヤキモチを焼く。
エリアス
人々に祝福(ギフト)を授けた女神。そのことで、ノワールから強烈な憎悪を向けられている。
シン
本作の主人公。最低級位のF級《テイム》を授かったせいで、侯爵家から追放されてしまう。

第一章　妨害作戦、続行！

俺――遠藤和也は、漫画やアニメが大好きな極々普通の高校生だった。

だがある時、車に轢かれてぽっくり昇天したかと思えば、剣と魔法のファンタジーな世界に侯爵家の長男として転生していたんだ。

そこでシンという新しい名を得た俺は、五歳の時に祝福という特殊な能力を貰ったんだが……それはなんと最低級位、F級の《テイム》だった。

最弱の魔物、スライムを従える程度のことしかできず、更に魔力容量と魔力回路強度という魔法の根源となる才能も平凡だったため、俺は虐げられた挙句に侯爵家から追放されてしまう。

だが、俺の《テイム》は少し特殊だった。スライムしか仲間にできないのは前提としても、桁違いの数を従えられたり、遠隔で指示を出せたり、視覚の共有ができたり……その他色々なことができたりと、案外便利な代物だったんだ。

そんな祝福に加えて、剣術魔術もしっかりと鍛えた結果、なかなかに強くなることができた俺は、冒険者として自由に生きることを決める。

それで、色々と活動していたら、ひょんなことからレイン王太子殿下とかいうやんごとなき身分の人からの指示で、祝福なき理想郷という組織について調べることになった。

そしたらびっくり、その組織では【強制】という魔法を用いて、祝福の内容で差別をする人間の大量殺戮をもくろんでいたんだ。

そして今、俺は遠隔でスライムを操作して、【強制】の魔法発動に必要な素材を調達しようとしている彼らの行動を妨害している真っ只中なのである――

「……来たか」

「キキィ？」

延々と物資搬入をプチプチ潰しまくってたら、数十万とある俺のスライム監視網の一つに、ある四人組が転移してくるのが確認できた。

「見た顔だな……」

一人は、以前祝福なき理想郷のアジトへスライムを潜入させた際に、視覚共有越しに確認できた男だ。確か、筆頭幹部のグーラだったかな。となれば、この四人全員が〝祝福なき理想郷〟の本アジトから送られてきた人員であることは容易に推察できる。

「……つーか、他三人の態度や強さ的に、もしかしなくてもこれ、全員幹部じゃね？」

上下関係がきちんとあるように見受けられる組織だったので、四人がフラットな関係に見えることからも、彼ら全員が同じ地位――すなわち幹部と、俺の中でいきなり結論が出てくる。

「んー……流石に四人固まってると、不用意にはやれないな……」

有象無象ならなんら問題はないのだが、こいつらは動きからしてどう考えても精鋭。しかも、ギルオ――幹部の一人が倒されたことを知っているのか、これでもかってほど警戒している。まあ、

やったのが俺だということまでは分かっていないだろうが。

おまけに、相当練度の高い空間属性魔法師がいるな。

「やりづらい……が、纏まって動くのなら、こっちはこっちでお前たちがいないところを潰すまで」

物資は、世界中から運ばれてくる。たった四人で――しかも固まりながら、全箇所を監視するなんて芸当、俺じゃあるまいし不可能だ。そもそもそれができるのなら、固まって動くより先にやっている。でもって、だからと手分けして行動しようとするのなら――その時は、各個撃破してやるとしよう。

「そんじゃ、やるか――開け」

「がはっ！」

「ぐあっ！」

「ぎゃあああ、あ、あ……」

俺は様々な場所で物資を搬入している連中を、転移門を開いてからの剣グサッ！　や、変異種スライムによる頸椎の溶解などをいい感じに使い分けることによって、次々と倒していく。

これまではアジトに転移されるギリギリのタイミングでやっていたが、別にその前に倒しちゃっても問題ないことに気づいたから、今は人気のない場所に入った瞬間にやっている。すると――

「〝主〟に付与していただいた連絡が途絶えた……Ｖ－１、２、Ｇ－３、４が、ほぼ同時にやられたようだ」

「えー本当ぅ？　だったら、すぐにそっちに行って、殺ろうよ！　グー君！」
「ネイア、迂闊に行けば罠にはまる可能性がある。物資の搬入をこれほどまでに手際よく潰している相手だぞ？　一体、どんな視野を持つ指揮官だ……」
グーラの報告と、それに対して即座に殺しに行こうと無邪気に話す女――ネイアの姿が見えた。
なるほど。〝主〟ことノワール――組織の首魁にして六百年を生きる最高峰の魔法師の魔法で、仲間の死を把握できるようにしているのか。それは厄介でもあり、チャンスでもあるな……
俺は念のため、連中を倒した場所へいつでも攻撃できるように待機しておく。
すると、グーラとともにいる男の内、一人が口を開いた。
「グーラ。流石に四人で固まって行動するのは、それはそれで悪手だ。二人一組で移動した方が、動ける幅は広がるし、何よりそっちの方が戦いやすいだろう？」
「うむ……だが……」
仲間の提案に、グーラが唸り出す。うーむ。随分とお悩みのようだ。
その時、レイン殿下のところにいるスライムから連絡が来た。
「今度はそっちかー！」
ただでさえ、諜報、監視、妨害のトリプルワークなのに、ここで会談が入ればクアドラプルワークになってしまう。しかし、無視するわけにもいかず、俺はレイン殿下のところにいるスライムとの〝繋がり〟を強化した。
「レイン殿下、本日はどういった御用件で？」

「あ、ああ……そうだね。シン、早速になるが、こちら側の動きを話すとしよう」
レイン殿下は、まるで俺の気迫に押されるかのように若干頬を引き攣らせたが、一瞬でそれを引っ込めると話を始めた。
「まず、我々グラシア王国は国を挙げて祝福なき理想郷と戦うことになった。ただし、国民には様々な兼ね合い――何より、敵の目的が前代未聞であることから、大混乱が起こることを考慮して、秘匿されることとなった」
「なるほど……まあ、仕方ないか」
強制的に祝福による差別をなくすなんていう、独裁者もびっくりなことをしでかそうとしてるんだ。しかも、それをやろうとしているのが漆黒の魔法師ノワールなのだから、マジでできそうじゃんって思われてしまうだろう。
なら、少なくとも事が済むまでは黙っておく方が無難だな。
「以上だ。あと、明後日一旦報酬を送る。事件が重なりすぎて遅くなってしまったこと、謝罪しよう」
「いえ、大丈夫ですよ。今回ばかりは、仕方ありません」
未払いにはガチで歯向かうけど、支払いの遅延にガタガタ言うほど、俺の心は狭くない。
「ふぅ。それで、シンの方から報告することはあるかい？」
「ございます。まず、物資の搬入は見える限りでは全て押さえており、その過程で敵方の幹部であるギルオを倒しました。ですが、どうやら少しやりすぎたようで、敵幹部が四人もこの対策のため

に出てきました。固まって動いているせいで、彼らに手を出すのは厳しい状況です」
「そうか……分かった。幹部の実力は、こちらも突入部隊経由で把握している。至急増援を送るとしよう。場所は？」
「現在はトラゴにいます。ですが、高位の空間魔法師が敵にいますので、移動される可能性は大いにあります」
「分かった。引き続き、できる限り妨害を。こちらも、王都近郊から順に、監視網を形成していく予定だから、それまではどうか頼む。また、幹部へはイグニス率いる精鋭部隊に二名の空間魔法師をつけて派遣する。準備が整ったら連絡するから、その際にまた場所を教えてほしい」
「了解しました。では」
会話を終えた俺は、〝繋がり〟を切ると、諜報監視妨害（トリプルワーク）に戻った。
纏まって動く四人の幹部をスルーしながら、物資の搬入を潰していく。最早、単純作業と化しはじめていたが、しばらくして幹部たちに変化が見られた。
どうやら、自分たちがいる場所以外が潰されていることに、違和感を持ちはじめたようだ。
「……薄々思ってたのだが、やはり我々の動向を監視している奴がいるな」
「あー私もそれ思った！　私たちがいないとこばっかり潰されるんだもん！」
筆頭幹部グーラの言葉に、同じく幹部のネイアが声を上げた。
そして、そんなネイアを他二人の幹部は、「静かにしろよ、こいつ……」という目で見ている。
「流石に気づかれたか……判断が早い」

「きゅきゅ？」
スライムのネムをもにゅもにゅと揉（も）みながら、俺は深く息を吐いた。
ただ、監視の手段まではバレていないっぽいから、まだ大丈夫のはず。
それに、そろそろ彼らの準備が整う頃だろう。そうすれば――勝負は俺の勝ちだ。
「……お。ナイスタイミング」
ちょうどその時、レイン殿下から連絡が来た。
俺はそっとほくそ笑むと、そっちにいるスライムとの〝繋がり〟を強化する。
「レイン殿下、準備が整いましたか？」
「ああ。イグニス以下六人の精鋭部隊を、外に待機させてある」
レイン殿下からは俺が望んだ通りの答えが返ってきた。
近衛騎士副団長イグニスを筆頭とした、少数精鋭パーティなら、ノワールもいないことだし、幹部たちを倒せると思う。
無論、俺もサポートするけどね……安全圏から！
「分かりました。現在四人は纏まって行動中。場所はジェノスの北側。下水道の十九列三十二番から南方向へ進行しています」
「そこか……分かった。至急送るから、できることなら一部始終を監視してほしい」
「分かりました」
連絡は手短に、俺はスライムとの〝繋がり〟を切る。

にしても、レイン殿下は凄いな。あの一瞬で、俺が言った場所がどこかを把握したのか……
一体どういう頭をしてたら、そんな芸当ができるんだよ。
俺は改めてレイン殿下の有能さに感心しつつ、四人の幹部の方に視線を移した。すると――
「……お、来たか」
イグニスたちが幹部四人から少し離れたところに姿を現した。幹部を挟み撃ちしようと、三人ずつに分かれて二か所からの出現だ。
シンプルだが、普通に強い。だって、対処のしようがないもん、それ。
「……ん？　誰かいる……あ、挟まれた!?」
イグニスたちは魔道具などで気配を消していたはずが、ある程度近づいたところでネイアに感知されてしまった。彼女は空間属性魔法師で、一定空間内における感知能力を高める魔法――【空間把握】を使っていたのだろう。
「……っ！　気づかれた！　行くぞ！」
わずかに遅れてイグニスらも、自分たちの存在が把握されたことに気づき、両側から駆け出した。
「なっ!?　イグニスだ！」
「ええ!?　流石に逃げるよ！　――【魔力よ、かの空間へ送れ】！」
グーラの焦燥感を帯びた叫びを受け、ネイアは驚いたように声を上げると、すかさず【空間転移】の魔法を唱えて、その場からの逃走を図ろうとする――が。
「やっぱ！　グー君。空間塞がれちゃってるから、破らないと駄目みたい！」

二手に分かれたイグニスたちのそれぞれに一人ずついる高位の空間属性魔法師が、転移阻害の魔法――【空間断絶結界】を重ね掛けして展開していた。更に、俺がバレない程度に空間魔法で妨害するというトリプルコンボによって、ネイアの逃走は不発に終わった。
「さーて。これでもう、戦うしかないね」
でも、ネイア、勝てるかな？　俺――じゃなくて、イグニスたちに！
「はあああああっ！」
仲間の付与術師と自前の強化魔法、更にはS級の《守護者》――防御に特化した祝福によってドチャクソに強化されたイグニスが、四人に突貫した。
そして一閃。その衝撃で空気がピリッと弾ける。
「――あっぶないねぇ！！！！！」
だが、ネイアが直前で空間を揺らしたことで、その攻撃は受け流されてしまった。
「はあっ！」
そして、その隙を突くかのように、グーラが魔法で作った漆黒の大剣を振り下ろす。
「はあああああっ！」
イグニスは自身と大剣の間に剣を滑り込ませ、それを完璧に防いでみせた。
「化け物だーー!!」
思わず叫ぶ俺。イグニスの強さは伝聞でしか聞いたことがなかったが、ここまでとは。
「ちっ！　俺とネイアでこいつを止める。ゼクシスは槍斧使い、ザイールは双剣使いとやれ」

速やかに飛ばされるグーラの指示。それにより、急襲で乱れた態勢を一気に持ち直した彼らは、弾かれるように自らが戦うべき相手の下へと飛ぶ。
実に的確な指示だな。そう俺が判断する間にも、イグニスは三度剣を振るう。
「強いですね……だからこそ、その力が悪しき所業に使われているのは、残念でならない」
「ほざけ！　騎士！」
「なんかムカつくぅ……！」
グーラとネイアの二人がかりでも、両者は互角だった。
グーラとイグニスが互いに剣を打ち合い、そこにネイアが度々、物理的な防御を無視して空間を裂く斬撃――【空間切断】による殺意の高い攻撃をするって感じ。
現状ではどっちが勝つか分からない。
「んー。ただ、練習なしでイグニスの戦闘を補佐できる自信はないし……うん。他二人の幹部を倒してからにするか」
他二人の幹部は、グーラやネイアに比べると弱く、その戦いも俺の目で追えるレベル。
だったら、こっちを先に倒して、味方にイグニスの補佐へ回ってもらおうというわけだ。
「さて、まずはあそこだ」
俺がまず目を付けたのは、手前で戦っている方だった。
「おらあああっ！」
「はあああっ！」

そこでは、白金の槍斧を振るう王国騎士団の部隊長フォーゲルトと、赤黒い不気味な大剣を振るう祝福なき理想郷幹部のゼクシスが壮絶な打ち合いをしていた。
「【空間よ、爆ぜよ】」
時たま【空間断絶結界】を常時展開している〝魔導特別隊〟が、空間を破壊してフォーゲルトの補佐に入っている。今はほぼ互角だが、徐々に王国側が押してきているってところかな。
「さて、どう介入しようか……」
フォーゲルトとゼクシスの得物は槍斧に大剣と、どちらも重いものだ。そのため、動きは他の面々と比べるとまだ遅く……まあ、それなら介入もしやすそうってことで、最初に選んだのだ。
「変異種スライムをゼクシスの首に〝召喚〟し、溶かす。それで生まれる隙だけでも、多分倒せる。だが――」
常時動かれているせいで、狙いが定まらない。
やれやれ。速度を考えてこっちを選んだというのに……あんま意味なかったな。
「……だが、あれだけ激しい戦闘だ。必ず膠着状態が来る。その時が――お前の終わりだ」
俺はスライム越しに向ける自分の視線が敵にバレないよう目を逸らしながら呟くと、眼前で行われている戦いに意識を集中させる。
「はあっ！」
フォーゲルトが、槍斧を左から横なぎに振るう。
「ぐうっ！」

その一撃を、ゼクシスは剣先が下になる形で大剣を垂直に振り下ろし、盾とすることで防いだ。
「はあっ！」
直後、フォーゲルトは槍斧（ハルバード）を前に突き出すことで、ゼクシスの右脇腹を貫こうとする。
「ぐっ！」
ゼクシスは地面に突き刺さったままの大剣を手放すと、後ろへ跳（と）んで刺突を回避した。
無手となり、大きな隙が生まれたように見える彼だが、動じることなく空中にいる間に、右手を懐（ふところ）へと忍ばせる。
「死ねぇ！」
次の瞬間、長針を三本、指に挟んだ状態で取り出したかと思えば、フォーゲルトの足と腕に向けて投擲（とうてき）した。微（かす）かに針先から散る雫（しずく）――毒が塗られているのだろう。
「【空間を開け】」
そこで介入してくるのが、魔導特別隊の空間属性魔法師――ノイ。
ノイは卓越した技量で、フォーゲルトの前に大きな【転移門（ゲート）】を展開し、飛来してきた長針を防いだ。
ヒュン！　ヒュン！　ヒュン！
しかも【転移門（ゲート）】の出口をゼクシスの背後に出している。
自身の攻撃が、そっくりそのまま自身に返ってくる状況――だが、長針を投げたゼクシスは、フォーゲルトを仕留めるべく、すでに低い姿勢で移動していた。

「うおおおっ！！！」
直後、フォーゲルトの左側に接近するゼクシスは、途中で回収した大剣を、刺突により伸びた腕を引こうとしているフォーゲルトの胴を両断せんとばかりに振り上げた。
「はあああっ！」
だが、フォーゲルトは腕を引き終え、槍斧（ハルバード）で再度突きの構えをすると、振り上げられた大剣を斧部分でしっかりと受け止める。
「はっ！」
更にそのまま、フォーゲルトはゴルフのような全力フルスイングで、ゼクシスの大剣の剣先を明後日の方向に向ける。
「はあああっ！」
そしてフルスイングの勢いでくるりとその場で一回転すると、ゼクシスの右脇腹目掛けて、猛烈な一撃をお見舞いした。
「ぐっ……！」
だが、ゼクシスはすんでのところで大剣を手放し身を引いたようで、フォーゲルトの攻撃は致命傷にはほど遠かった。しかし、こちらの攻撃はこれで終わりではない。
「【魔力よ。空間を斬れ】」
「がはっ！」
放たれるノイの【空間切断（スペーショナルスラッシュ）】。それが、今度こそゼクシスの右半身を深く裂いた。

血を吐き声を上げるゼクシスと、口角を上げるフォーゲルト――だが。
「……なんてな」
致命傷を告げるかのようにゼクシスの右半身から噴出していた血が、突如として刃の形に変形すると、フォーゲルトに襲いかかった。
「ぐはっ……！」
不意を突かれ、右肩から腹にかけて深く斬り裂かれたフォーゲルトは、大きく後ろへ跳んだ。
そして、ポーションをぶちまけて即座に傷を治療する。
しかし、それによって隙が生まれた。それを狙って――
「もらった」
ゼクシスは素早い動きでノイの広範囲攻撃をかわしながら、フォーゲルトに視線を向ける。
直後、大剣が吸いつくように飛んできてゼクシスの右手に収まったかと思えば、大剣はぐにゃりと鞭に変形し、まるで生き物のように蠢きながらフォーゲルトとノイに襲いかかった。
「ぐっ！」
ノイは自身の身を守るので限界で、フォーゲルトを助ける余裕はない。
【空間断絶結界】を解除し、全力で戦う準備をする時間もない。結果――
「が、あ……っ！」
フォーゲルトの左腕が、宙を舞った。
マズいな。今ここで、それを治すのは不可能――戦力半減だ。

「俺を剣士だと思ったこと――それがお前らの敗因。なにせ、俺の本職は――剣士ではなく、錬金術師だからな」
ゼクシスは大剣を元の剣の形に戻すと、悠然と佇みつつそんなことを言った。
なるほど。錬金術師か。
錬金術師とは、簡単に言えば科学に魔法を交えた術――錬金術を扱う者を指す。
製作物として有名なものは、薬師が売る風邪薬や、医師が扱う消毒液あたりだろうか。
そんな錬金術師にも色々と系統があるが、奴は人体系で、血液操作や肉体改造が得意……って感じかな。
まあ、そんなことはどうでもいい。それよりも――
「勝ちを確信したのか知らんが――隙だらけだぞ」
戦況をずっと俯瞰していた俺は、動きを止めたゼクシスに告げた。直後――
「ん？　ぐ、なんだぁ!?」
俺が奴の首に召喚した変異種のスライムが、そこを溶かしたのだ。
ゼクシスが悲鳴を上げる中、俺はすかさずその変異種スライムを撤退させると、今度は足に召喚して腱を溶かす。同時に、殺気を放った。
「ぐ、はああっ!!」
ゼクシスは危機感からか、スライムがいる場所を大剣の腹で叩くと、素早い動きで後ろを向いた。
その時。

「が、はっ……！」
奴の腹から、槍斧（ハルバード）の先が顔を覗（のぞ）かせた。
いくら左腕を失ったとて、それでフォーゲルトが完全に無力化されるわけではない。
「はあああああああっっっ！！！！！」
フォーゲルトは咆哮（ほうこう）を上げながら、腕に力を込め、槍斧（ハルバード）を上へと突き上げた。
「がっ……〝主〟……」
ゼクシスは上半身を縦に真っ二つにされて、命を落とした。
「よし。倒したか」
無事……とは言えないが、幹部の一人が倒れたことをこの目で確認した俺は、小さくガッツポーズを取った。
よしよし。幹部を一人倒せば、一気に戦況はこちらへ傾く。
フォーゲルトは片腕しかないせいで、戦いに交ざるのは難しいが、空間属性魔法師であるノイの護衛ぐらいはできる。フォーゲルトに守られながら、ノイがチクチク殺意の高い空間魔法で攻撃すれば、相手は相当嫌がるだろうな。
「で、次は反対側で戦っている幹部を潰したいのだが……」
イグニスたちはさておき、別の幹部の方に視覚を移した俺は、見た瞬間、頬を引き攣らせた。
「……あの幹部、スライムとの相性最悪じゃね？」
そこで戦う〝祝福（ギフト）なき理想郷〟幹部――ザイールは、なんと全身に炎を纏わせつつ、拳（こぶし）で戦っていた。
見たところ、炎を防具のように纏う魔法――【炎衣（フレイムクロス）】の独自改造版といった感じだが……あれじゃあ、スライムを近づかせることすらできない。
「スライムで倒すとなると、必然的に魔力切れを待つことになるが……そんなの待ってらんないし……」
どうせ魔力回復薬でも持ってんだろうなぁと思いながら、俺がどうしたもんかと思考を巡らせはじめた時――
「……待て。なんだあれは？」
シュレインに配置しているスライム越しに、俺は見た。
禍々（まがまが）しい姿をした、巨大なドラゴンを――

◇　◇　◇

シュレイン近くの森にある、本アジトにて。
計画の最終準備に入っていたノワールが、ピクリと体を揺らした。
そして、目を見開きつつ声を落とす。
「馬鹿な……ゼクシスが死んだ……」
そう。ゼクシスの死を感知してしまったのだ。

ノワールはすかさず【観察者】を行使し、ゼクシスがいた場所を見やる。
そこには【空間断絶結界】が重ねがけされており、普通であれば見えない――が、生憎ノワールは普通ではない。故に、これくらいなんの問題もなく、中を見ることができた。
「……くっ」
そこには、見るも無残に倒れているゼクシスの姿があった。
予想通り……もう、救えない。あの魂では無理だ。
そんな現実を前に、ノワールは「なんのための蘇生魔法だ」と悔恨の念を口にするが、すぐに今はそれどころではないと、残っている三人の幹部を見る。
「ほぼ互角。いや、ゼクシスがやられたことで不利になった。俺が手を出さねば……だが――」
今それをするのは、自らの居場所をバラしかねない危険がある。
(しかも、ここまで進めた状態で下手に動くと、女神エリアスにあれが見つかる可能性が出てくる。そうなれば、俺の敗北は確定だ)
女神エリアス――この世界における神にして、祝福を授ける超常存在。
そして、ノワール最大の敵。
部下を助けたことで、目的そのものが達成できなくなれば本末転倒もいいところだ。
「……やるしか、ないのか……」
だが、この状況で打てる手がないわけではない。
あくまで、自分自身が介入しなければいいということなのだから。

「だがこれは流石に……無辜の民も大勢死ぬ。どの道大半が死ぬが、それでも……」
ノワールは、悩む。とにかく、悩む。だが、先を考えて――仲間を想って――決断をした。
「すまない。やろう」
そう言ってノワールが転移したのは、アジトのすぐ外だった。
豊かな森が広がるそこで、ノワールは手を掲げると、詠唱を始める。
「【封印を解け――解放】【我が従魔。我が意に応えよ――〝召喚〟】」
直後、地面に超巨大な漆黒の魔法陣が出現する。
そこからゆっくりと、悍ましい何かがずずずと姿を現していく。
「深紅の剣士ルージュ、白金の騎士ブラン、翠緑の賢者ヴェールと共に封印した、六百年前、大陸中央の世界樹を喰らっていた厄災。こいつを解き放つ時が来るとは、思わなかったな」
出現するのは、危険な魔物が跳梁跋扈していた時代に世界を救った〝六英雄〟の内の三人とノワールをもってしても【冥楔領域】と召喚魔法の複合技で封印するしかなかった伝説の魔物。
その名も――ニーズヘッグ。
「《テイム》の祝福のせいで廃れてしまった召喚魔法。久々に使うが、衰えていないな」
長年研鑽を積んだ召喚魔法よりも、初めて使うA級の《テイム》の方が、強力な魔物を使役できる――その事実が、召喚魔法を廃れさせた。多くの召喚魔法師の居場所を奪った。
だが、ある程度の型にはまった祝福とは違い、召喚魔法は使い方次第でいくらでも応用が利く。
努力した人間の居場所を奪い、後進たちの更なる研鑽を奪った祝福は、善なのだろうか――

「……顕現した、か」
やがて、ニーズヘッグが完全に姿を現したところで、ノワールはある命令を下した。
「ニーズヘッグよ。このまま真っ直ぐ行き、全てを蹂躙しろ。ただし、俺が今お前に念話で送った顔の人間は俺の仲間――絶対に殺すな」
「蝟ｰ繝ｩ縷ｦ蜈ｩ繝？Ｙ蝟ｰ繝ｩ縷ｦ蜈ｩ繝？Ｙ蝟ｰ繝ｩ縷ｦ蜈ｩ繝？Ｙ蝟ｰ繝ｩ縷ｦ蜈ｩ繝？Ｙ――！！！」
ノワールの命令に、ニーズヘッグは悍ましい咆哮を上げると、待ちきれないとばかりに勢いよく飛び出していく。
「六百年前にあいつに殺されたのが推定四億人だから……人が多い場所だし、今回だけでも一千万は確実か」
とんだ化け物だと息を吐きながら、ノワールは〝祭壇〟へと戻っていった。

◇　◇　◇

突如出現した禍々しいとしか言いようがない、黒い身体を持つドラゴン。
体長は百メートルになるだろうか。どっからどう見ても、普通のドラゴンじゃない。
絶対ヤベー奴だ。
「いや、待て待て待て……それは聞いてねーぞ……？」

そもそも、あいつどっから出てきたんだよ！　シュレインの森から、いきなり出てきたぞ？
……ん？　シュレインの森？
〝祝福なき理想郷〟の本アジト、漆黒の魔法師ノワール……
……うん。
「絶対ノワールじゃないかー！　何してくれてんの⁉　……しかも、こっちに向かってきてるー！」
絶対幹部たちへの援軍だよ、と俺――シンは猛烈に頭を抱えたい衝動に駆られてしまう。
いやー……あのドラゴン、絶対強いって。なんかもう、見るからにヤバい雰囲気がぷんぷんしている……
「流石にイグニスでも勝てんって……ちょ、とりあえず緊急でレイン殿下に連絡するか」
幸いなことに、今レイン殿下は俺からの連絡待ちのため、スライムを手元に置いている。
俺はスライムとの〝繋がり〟を強化すると、口を開いた。
「レイン殿下。緊急の要件です」
「っ！　分かった。簡潔に説明してくれ」
レイン殿下は、俺の焦りを感じ取ったようだ。
「はい。シュレイン上空に突然、体長百メートルはある、黒く禍々しいドラゴンが姿を現しました。そしてそいつは、かなりの速度で幹部と戦うイグニスたちのもとへ飛んでいます。到着まで、あと五分ほどってところかと」
「そうか。状況からして、ノワールが仕向けたのだろう。それで、ドラゴンの特徴は？　もしかしたら何か分かるかもしれない」
「はい。禍々しいとしか表現できない姿。血のように赤い瞳。角は八本。額に紫色の六角形の宝玉のようなものが埋め込まれています。あと、鳴き声が非常に独特で、悍ましいものでした」
俺は素早く、思ったことを口にしていく。
すると、レイン殿下の目があらん限りに見開かれた。
直後、ガタッと勢いよく椅子から立ち上がると、「少し待っててくれ！」と言って、部屋の本棚を乱雑に漁りはじめた。そしてすぐに、一冊の本を持ち出してくる。
レイン殿下は本のあるところで手を止め、俺にそのページを見せた。
「シンが見たのはこいつか？」
「……！　はい、そうです」
俺は目を見開いたあと、頷いた。
まさか……こいつだったとは。
俺は、絵の上に書かれている奴の名を呟く。
「……ニーズヘッグ。かつて世界樹を喰らった厄災。何故、まだ生きて……？」
「ニーズヘッグは伝承によると、〝六英雄〟によって封印されたと言われている。つまり、討伐はされていないというわけだ」
歴史による裏付け。そして、姿形。
どうやら……本当に、あれはニーズヘッグなのだろう。

俺が顔を青ざめさせる中、レイン殿下が声を上げる。
「落ち着け、シン。ひとまず、イグニスたちを撤退させよう。それから準備だ。伝承通りの強さなら、全戦力を投入し、そこに国宝である〝六英雄〟が遺した魔道具を使えば……」
事態のヤバさを理解しながら、冷静に指示を飛ばすレイン殿下。
流石……だな。
だが、その顔には「勝つのは無理だ」という思いが、ありありと浮かんでいるのが見て取れてしまった。聡明故に、結果が見えてしまうというやつだろう。
「分かりました。俺は何を？」
「シンは引き続き、従魔を通してニーズヘッグの動向を追ってくれ！　ファルスが過労で倒れた今、すぐに動かせるのはシンしかいないんだ！」
「ちょ――」
マジかよ⁉　ファルスなに倒れてくれちゃってんの⁉　レイン殿下の護衛だろ⁉　この緊急事態に！
だが、動けないのなら仕方ない。嘆くのは無駄だ。
「よし。撤退させよう」
レイン殿下がそう言った直後。
リンリンリンリン――！
イグニスたちの方から、大きなアラーム音が聞こえてきた。

なるほど。言葉で伝えるより、こうした方が早いし確実だな。
「な⁉　――撤退！」
戦闘の最中、イグニスが声を上げた。直後、二人の空間属性魔法師が動く。
「【かの空間へ送れ】」
そしてイグニス含む六人が、一斉にその場から姿を消した。
やっぱ強者は、判断が速いな。
一方、敵の幹部たちはいきなりの撤退に戸惑（とまど）っている。
「え？　何があって……？」
「とりあえず、一旦アジトへ転移するぞ……ゼクシスの死体は、持ってくか」
「だねだねー……【かの空間へ送れ】」
だが、やはりこちらも判断が速い。すぐにネイアの転移魔法で、アジトへと戻っていった。その直後――
ドオオオオオオン――！！！
下水道の天井が破壊され、ニーズヘッグが姿を現した。
「蝟ｰ繝ｩ繧ｦ蜈ｷ繝？Υ蝟ｰ繝ｩ繧ｦ蜈ｷ繝？Υ蝟ｰ繝ｩ繧ｦ蜈ｷ繝？Υ蝟ｰ繝ｩ繧ｦ蜈ｷ繝？Υ――！！！」
そして、悍ましい咆哮を上げる。
ちっ、どうやらノワールに結構細かいところまで、命令されてたっぽいな。

俺はテイマーとして、スライムを通して眼前にいるニーズヘッグを見据える。
「……こいつは止めとかないとマズいな」
恐らくこのまま、こいつは全てを蹂躙する気だ。完全にノワールの下についていないように見えるのが、その証拠だ。本能のまま、破壊されるのは……流石に止めないと。
俺はまだ、死にたくないんだ！　この世界で、冒険がしたいんだ！
「……幸いなことに、恐らく俺とニーズヘッグの相性はいい」
「……シン？」
俺の言葉を聞き、レイン殿下が絞り出すように声を漏らした。
「レイン殿下。俺が、ニーズヘッグを足止め……いや、殺します」
「なあ、いくらなんでも無謀だぞ、それは……！」
レイン殿下は窘めるように言う。
ああ、だろうな。だがな、やりようはあるんだよ。
余談にはなるが、軍隊アリっていう、人や大型動物をも殺すアリが、地球には存在しているらしい。これから俺がやるのはまさしくそれ。簡単に言えば、前やったやつの超強化版だ。
あの時は相手の数が多かったせいで、考えることが多かったが……今回は一匹。
十分、相手できる。
「レイン殿下。それじゃ、やりますね」
「な、待て――」

俺はスライムとの〝繋がり〟を打ち切った。
そして、周囲にいる人間を片っ端から爪で斬り裂いていくニーズヘッグを見やると、口を開いた。
「あの日家を出た時から、今日で三か月ほど経った。腕も更に上がり、スライムの数も、一気に増やせた」
結構な激戦になるだろうな。だが、不思議なことに、負ける気がしない。なんでだろうね。相手は、厄災のニーズヘッグなのに。まあ、それはどうでもいい。
「きゅきゅ！」
「ああ、頑張るよ」
俺は応援してくれるネムを撫でると、溶解液を出せない超ミニミニスライムなどを除いた全てのスライムを、いつでも召喚できるようにした。
それから、右手を掲げると、ニヤリと笑ってみせる。
「百万匹のスライムと一匹のドラゴン。どっちの方が強いか、試してみるか？」
直後、百万匹のスライムが、ニーズヘッグの足元に姿を現した。
「蝟ｰ繝ｩ繧ｦ蜈ｵ繝？Υ蝟ｰ繝ｩ繧ｦ蜈ｵ繝？Υ蝟ｰ繝ｩ繧ｦ蜈ｵ繝？Υ蝟ｰ繝ｩ繧ｦ蜈ｵ繝？Υ蝟ｰ繝ｩ繧ｦ蜈ｵ繝？Υ――！！！」
足元に大量のスライムが突然出現すると、ニーズヘッグは手を止め、鬱陶しそうにそこへと視線を向けた。
「よし。やれ！」

そのわずかな隙を利用して、俺はスライムを他のスライムのところへ〝召喚〟する能力を応用した高速移動術で、一気にスライムたちをニーズヘッグに纏わりつかせる。
「驍ェ鬲秘が鬲秘が鬲秘が鬲秘が鬲秘が鬲秘が鬲――！」
すると、ニーズヘッグはまるで苛立ったように咆哮を上げた。
次の瞬間、ニーズヘッグの身体が紫色のオーラに覆われる。
「来たか。【魔力吸喰】」
周囲に存在する、ありとあらゆる魔力を吸収し喰らう――奴の代名詞とも呼べる能力だ。
シンプルながら、その威力は桁違い。あいつの前に立てば最後、一瞬で魔力を枯渇させられ、それにより命を落とすのだから。だがな――
「それ、スライムには効かない。いや、意味ないよ？」
俺は、思わず笑みをこぼす。
俺の言葉通り、スライムたちは――
「「「「きゅきゅきゅきゅきゅきゅきゅきゅきゅ――っ！」」」」
なんのこれしきとばかりに、ニーズヘッグへ襲いかかっている。
「驍ェ鬲秘が鬲秘が鬲秘が鬲疲ュ繝肴ュ繝肴ュ繝肴ュ繝――！」
ニーズヘッグは、より一層苛立ったように、襲いかかってくるスライムたちへ爪を振るった。だが、それはあえなく空を切る。
だって、俺が〝召喚〟で避難させたから。

ああ、そうそう。それで、なんでスライムに【魔力吸喰】が意味をなさないのかっていうと……
「……【魔力吸喰】を使っても、生きた生物の保有魔力を完全にゼロにするのは不可能なんだ。どうやっても、どれだけ完璧にやっても、わずかながら残る」
何故こうなるのか、理論的に説明しろと言われても分からない。強いて例えるなら、地面に落ちている埃を箒と塵取りで全部回収するのは難しい……って感じだろうか。
「で、スライムが活動するために必要な魔力量は――馬鹿みたいに少ない。ニーズヘッグが喰らった後で残る魔力量よりも」
そう。これが無効化のカラクリ。
スライムという、魔石すら持たないほど魔力量の少ない魔物だからこそ、実現できるものだ。
「さあ、ここからは我慢比べだ。俺が疲労でぶっ倒れるのが先か、お前が溶かされるのが先か――もっとも、俺はここ最近ハードワークだったお陰で、随分と徹夜には慣れてるぞ？　しかも、今は装備も万全だ」
そう言って、俺はいくつもの魔法石を手に取った。そして纏めて砕く。
直後、ニーズヘッグの翼の付け根を溶かしにかかっていたスライムから、雷の槍がいくつも放たれ、ほんのわずかながらもニーズヘッグに傷をつけた。
「手持ちの中で、一番貫通力のあるやつでもこれか……だが、いい。あそこを起点に溶かしてやる」
現状一番面倒なのは、飛ばれてしまうこと。

勿論一匹でもニーズヘッグに引っついていれば、残り全てもそこへ〝召喚〟できるから、飛ばれても攻撃できなくなるってわけではないのだが……攻撃速度は格段に落ちてしまうし、被害も拡大してしまう。だったら、その元凶となる翼を先にぶっ潰してしまおうってわけ。

「驍ェ鬲秘が鬲秘が鬲秘が鬲疲ュ繝肴ュ繝肴ュ繝肴ュ繝――！」

「「「「きゅきゅきゅきゅきゅきゅきゅきゅきゅ――っ！」」」」

スライムたちのことを〝煩わしい雑魚〟から〝面倒な奴ら〟へと認識を変えたのか、ニーズヘッグからの攻撃がより苛烈になった。

だが、苛烈になったところで、俺の〝召喚〟の前には無力。結果、ニーズヘッグはスライムを一匹も殺すことができないまま、少しずつ少しずつ、その身を溶かされていった。

「ただ、これ……マジでどんぐらいかかるんだろうなぁ……」

圧倒的な手数でゴリ押ししてる感はあるが、実際のところ、そこまで目立ったダメージは与えられていない。

そりゃそうだ。なんてったって、相手は厄災ニーズヘッグ。〝六英雄〟――そして恐らく、当時のノワールの力をもってしても、倒しきれなかった相手だ。

相性がいいからって、楽に倒せるほど、こいつは甘くない。

「だが、いいぜ。折角手札を晒したんだ。他の奴らが恐れ慄くほどの戦果を上げてやるよ！」

それでも俺は吠え、長い長い戦いに挑み続ける。

◇　◇　◇

「くっ……おい！　ジェノスと至急連絡を！」

シンとの連絡が切られた瞬間、私――レインは文官へ指示を飛ばしていた。

「は、はっ。すぐに確認いたします」

文官たちはそう言って、慌ててニーズヘッグの進路であるジェノスへ魔導通信を送り、連絡をする。

そして、一人の文官が口を開いた。

「ジェノス領主館から暗号信号を受信いたしました！　解析したところ、巨大なドラゴンが襲いかかってきて、街が一瞬で半壊したとのことです。また、領主館も危険で、これ以上の連絡は不可能とのこと」

「そうか……くっ」

文官からの報告に、私は思わず悪態をつく――次の瞬間、コンコンと扉がノックされた。

「レイン殿下。イグニスです」

先ほど緊急で撤退させたイグニスたちが、戻ってきたようだ。

「入ってください」

私は即座に入室を許可する。すると、イグニス含めた五人が、部屋に入ってきた。

「ご報告がございます。戦いの末、敵幹部一名を撃破。しかし、それによりフォーゲルトが左腕を

失い、緊急治療を受けております」
「そうか……分かった。すまないが一刻も早く、イグニスとノイの二人でジェノスの様子を見てきてほしい。そして、すぐに戻り報告を。ただし、確認は遠目からだ。絶対に、近づかないでほしい」
私はイグニスたちにすぐに次の命令を飛ばした。労いたいが、今は時間がないんだ。すまない。
「はっ。では、即座に向かわせていただきます……ノイ」
「はっ。【かの空間へ送れ】」
直後、イグニスとノイの二人が消えた。
頼む。どうか生きて、情報を拾ってきてほしい。
それから十分後――
「レイン殿下。ただいま戻りました」
「ただいま、戻りました」
王城内へ直接転移することが不可能なため、王城外の庭に転移した二人がここまで戻ってきた。
「レイン殿下……そこには、悍ましい巨大なドラゴンがいて、街を破壊しておりました」
「そうか……」
イグニスの報告に、私は思わず顔を歪めてしまった。
だが、続けて発せられた言葉に、私は唖然とさせられることとなる。
「ですが、何十万匹とも思える大量のスライムが、群れをなしてそのドラゴンに襲いかかっており

ました。しかも、戦況はほぼ互角です」
イグニスは真面目に言うが、その内心が驚愕で彩られていることは、顔を見て声音を聞けば明白だった。
「スライム……まさか――」
私は、はっとした。そのような状況を作れるのは、彼しかいない。
まさか――本当に彼が戦っているというのか？
「す、すみません。もしかしたら、幻術を見せられているかもしれませんが……」
「いや、それこそまさかだ。それに、私には心当たりがある。だから、現実だ」
何が起こっているのか分からない。だが、今はそれに縋るしかない。
連絡が付き次第、シンから詳しい話を聞かないといけないね。
「……よし。こちらはやるべきことをやろう。一刻も早く、ノワールを止めるために」
そう言って、私は再び動きはじめた。

◇　◇　◇

一体どれほどの時間が経過しただろうか。
もう、余計なことを考える余裕すらなくなった俺――シンは、ただひたすらにニーズヘッグと戦い続けていた。

「驍ｪ髙斐せ繝ｫ繝顔？繝ｯ繧ｷ繧 、驍ｪ髙斐せ繝ｫ繝顔？繝ｯ繧ｷ繧 、驍ｪ髙斐せ繝ｫ繝顔？繝ｯ繧ｷ繧 、驍ｪ髙斐せ繝ｫ繝顔？繝ｯ繧ｷ繧 、――！！！」

「「「「きゅきゅきゅ――！！！」」」」

あれから、スライムは一切数を減らすことなく、ニーズヘッグの身を溶かし続けていた。一方、ニーズヘッグは最初と比べて明らかに動きが鈍（にぶ）っているように見える。

問題は俺だ。

「……エネルギー、補給」

「きゅきゅきゅ！」

俺はネムに頼んでリュックサックから保存食を持ってきてもらうと、それを口に放り込んだ。そうして体力を少しでも回復させ、引き続きニーズヘッグと戦い続ける。

「……削れてきたな」

ここに来て、ようやくニーズヘッグに変化が起きた。

なんと、小さいながらも目で見えるレベルで身体の一部に穴ができていたのだ。

これは、何十万何百万というスライムが溶かし続けたことによるもの。

俺はその穴を発見すると、そこにスライムを入れ、内部へ侵食を始めた。

その時だった。

「逞帙う逞帙う逞帙う逞帙う逞帙う逞帙う逞帙う逞帙う逞帙う逞帙う逞帙う逞帙う逞帙う逞帙う逞帙う逞帙う逞帙う逞帙う――！！！」

ニーズヘッグが、今までにないぐらい悍ましい咆哮を上げた。

その様子に危機感を覚えた俺は、ニーズヘッグの動向により意識を向ける。

するとと案の定、ニーズヘッグが――変わった。

「譁ｬ繝ｬ譁ｬ繝ｬ譁ｬ繝ｬ譁ｬ繝ｬ譁ｬ繝ｬ譁ｬ繝ｬ譁ｬ繝ｬ譁ｬ繝ｬ譁ｬ繝ｬ譁ｬ繝ｬ譁ｬ繝ｬ譁ｬ繝ｬ譁ｬ繝ｬ譁ｬ繝ｬ譁ｬ繝ｬ譁ｬ繝ｬ譁ｬ繝ｬ譁ｬ繝ｬ譁ｬ繝ｬ！！！！！」

黒板に爪を立てるような、甲高（かんだか）く耳障りな咆哮を上げた直後。

ニーズヘッグの身体中に、ピシピシッと亀裂が生じはじめた。

「――!?」

嫌な予感がした俺は、即座に〝召喚〟を駆使してスライムたちを少し離れたところに避難させた。

次の瞬間。

ズシャシャシャシャ――

なんと、ニーズヘッグは身体中から、無数の黒い刃を突き出した。

そうして刃で全身を包んだニーズヘッグは、仕返しとばかりに避難したスライム集団へタックルをかましてくる。

「……なるほど。けれど、悪手だな」

そのタックルを当然のように躱（かわ）させた俺は、ニーズヘッグの刃と刃の隙間にスライムたちを召喚し、溶解を再開させる。

「確かに溶かせる面積は減った。だがな、刃と鱗の接続部位――結構脆いぞ？」
何かと何かの接続部位は、どう考えても脆い。普通に考えれば分かることだ。
だったらそこを溶かして刃と鱗を切り離し、更にそれによって生まれるであろう隙間を溶かせば――倒せる。
「ははは――さあ、終わってくれ！　ニーズヘッグ！　そしてスライムの糧となれ！」
長いこと戦い続け、若干頭がおかしくなっている俺は、口の端を吊り上げた。
そして、より一層苛烈にニーズヘッグを攻め立てる。
「繝輔じ繧ア繝ォ繝翫カ繧カ繧ア繝ォ繝翫カ繧カ繧ア繝ォ繝翫カ繧カ繧ア繝ォ繝翫カ繧カ繧ア繝ォ繝翫カ繧カ繧ア繝ォ繝翫カ繧カ繧ア繝ォ繝――！！！！！」
「「「「きゅきゅきゅきゅきゅ――！！！！！」」」」
ここが戦いの分水嶺だと理解する俺は、思考速度を上げる魔法――【思考加速】の魔法石の残りを砕いた。
そしてより繊細に、より早く、より確実に、ニーズヘッグを溶かし続けた。
それを、長く長く続けていると――
バキッ。そんな音を立てて、一本の刃が零れ落ちた。
バキッバキッ――バキバキバキバキッ――
それを皮切りに、次々と漆黒の刃が脱落しはじめる。
「終わりだ――」

俺は、刃が突き出ていた場所にスライムを潜り込ませた。
その後も、変異種スライムをヒット&アウェイさせながら、多方面からニーズヘッグの内部へと、じわじわじわじわじわじわ侵食していく。
「謌代ϒ豁コ繧ケ繝頑？繝イ豁コ繧ケ繝頑？繝イ豁コ繧ケ繝頑？繝イ豁コ繧ケ繝頑？繝イ豁コ繧ケ繝頑？繝イ豁コ繧ケ繝頑？繝イ豁コ繧ケ繝頑？繝イ豁コ繧ケ繝――！！！！！」
すると、次に聞こえてきたのは絶叫とも呼べる声。
ニーズヘッグが命の危機を感じはじめたのだ。それが、肌身で感じ取れる。
「……獣は死の間際にしぶとく暴れまわるらしいが――そんなことは、させねぇ」
今だ。今こそ、あれを進める時だ。戦況からそう判断した俺は、出し惜しみをすることなく、ニーズヘッグの魔石がある胸部を集中攻撃しはじめた。
「豁サ繝梧ュサ繝梧ュサ繝梧ュサ繝梧ュサ繝梧ュサ繝梧ュサ繝梧ュサ繝梧ュサ繝梧ュサ繝梧ュサ繝梧ュサ繝梧ュサ繝梧ュサ繝梧ュサ繝梧ュサ繝梧ュサ繝梧ュサ繝梧ュサ繝――！！！！！」
悶え暴れるニーズヘッグ。
そりゃそうだ。魔石を集中攻撃されたら、誰だってこうなる。
だからこそ、確実に仕留められるこの時まで、バレない程度にしか溶かしていなかったのだ。
「だがな――もう終わりだよ、ニーズヘッグ。スライムによって溶かされ、喰いつくされてくれ……っ！」
それから――わずか十五分で。

「門ャ鮖ソ繝企ヲャ鮖ソ繝企ヲャ鮖ソ繝企ュ泌鴨繝イ繝ィ繧ゥ繧サ鬲泌鴨繝イ繝ィ繧ゥ繧サ鬲泌鴨繝イ繝ィ繧ゥ繧サ蝟ー繝ッ繧サ蝟ー繝ッ繧サ繝ュ蝟ー繝ッ繧サ蝟ー繝ッ繧サ繝ュ！！！！！　――蝟ー繝ッ繧サ――繝ュ……」

ドオオオオン――

ニーズヘッグは、大きな地響きを上げて倒れ伏した。

「勝った……スライム、奴の全てを、喰らい、つく、せ……」

「きゅー！！！！」

そして俺も、スライムたちに最後の命令を下したのと同時に、ネムの悲鳴を聞きながら、意識を手放した。

「……ん……んん？」

首元のひんやりとした感触と、光の眩しさを感じ、俺はゆっくりと目を開いた。まずは首元を手で弄る。

「きゅきゅ？　きゅきゅ！」

すると、もにゅもにゅとした感触と同時に、聞き慣れた鳴き声が耳に入ってきた。

えっと……ああ、ネムだ。

その後、俺は窓から差し込む陽光を確認すると、ネムを胸元で抱えながら、ゆっくりと上半身を起こした。

「んっと、どうしてたっけ……ああ、あれか」

やがて、意識が鮮明になってきた俺は、どういう経緯で眠っていたのかを悟った。

「……あ、ニーズヘッグとスライムは!?」

あの時は、色々と余裕がなさすぎて、ちゃんと確認することができなかった。

そう思った俺は、即座にジェノスにいるスライムに視覚を移す。

そこには、多くの建物の残骸と、幾人もの人間の姿があった。

「ああ、ちゃんと綺麗さっぱり喰ってくれたんだな。ニーズヘッグを」

あの時、俺が最後に下した命令。それは、下手にあいつの死体を放置するのは危険だと、本能で察していたのはある。

また、スライムに喰わせることによって、スライムが強化されるのではないかとも思ったのだ。

何せ、相手は伝説の厄災。そんじょそこらの魔物とは、文字通り次元が違う。

「えっと……俺が寝てる間に、スライムは皆ある程度バラけてくれたみたいだな。あとで、元の場所に送るとするか。それで、スライムたちに変化は……んー……ちょっと強くなった？」

スライムとの〝繋がり〟を強化して、何か変化がないか確認してみたところ、本当に若干強くなっているような気がした。マジで、本当に若干だけど。

例えるなら、握力が三十キロから三十四キロになった感じ……ちょっと分かりづらいな。

まあ、とりあえず強くなったってことにしておくか。

「さてと。それで、他に動きはあるのかな……？」

俺は〝召喚〟しなかった一部のスライムを起点に、スライムたちを元の場所に戻しながら、国中を文字通り見て回った。
その結果、どうやら俺が寝ている間に王国側ではちゃんと防衛網が築かれたらしく、俺なしでもある程度の祝福（ギフト）なき理想郷の物資搬入は防げたようだ。
だが、完璧とまではいかず、幹部を筆頭とした集団に、一部出し抜かれてしまっていた。
「んーなるほど……ん？」
『きゅきゅー！』
そこへ、突然スライムから連絡が掛かってきた。
相手は当然、レイン殿下。というか、殿下しか相手がいない。
「はい。レイン殿下。どうされましたか？」
俺はスライムとの〝繋がり〟を強化すると、眼前のレイン殿下にそう問いかけた。
すると、レイン殿下は見て分かるぐらい安心したように安堵の息を吐いた。
「ああ、よかった。無事だったんだね」
「流石に、俺も心配したぞ」
その後、レイン殿下と、後ろで控えるファルス伯爵子息は、それぞれそんなことを言った。
まあ、ニーズヘッグと戦ったからね。心配するのも無理はない。
「そうですね。心配をおかけしました。ひとまず報告として、ニーズヘッグは討伐しました。もう、この世界に現れることはないでしょう」

とりあえずといった感じで、俺は形式ばった態度でそんな報告をした。
やっぱ、これはちゃんと言っておかないとな。
あの状況から、俺がやってないなんて、言えるわけもないし。
すると、二人の顔が唐突に強張（こわば）る。
「倒したんだね……すまない。上手く言葉に言い表せなくて」
レイン殿下が絞り出すようにして、そんな言葉を口にした。
あー確かにニーズヘッグって、正攻法じゃまず倒せない化け物だからね。
更なる化け物か、俺みたいに上手いこと相性が噛み合わないと、勝利するのは絶望的だと思う。
ていうか、相性がよくても割とギリギリだったんだけど。
「それで、あれから体調が戻った俺がミルスの目を通して、遠くから戦いを見ていたのだが……凄（すさ）まじかったな。あれ全て、スライムなのだろう？　あれほどのスライムを、従魔として手足のごとく従える。同じテイマーとして、畏怖（いふ）すら覚えたほどだ」
続いて、ファルスがそんな言葉を漏らした。ちなみに、ミルスとは彼が使役するファントムバードのことだ。
「そうですね。まあ、あれが私の特殊な点と言いますか、私には従魔にできる魔物の数の上限が、今のところないんですよ。故に、現在は百万匹を超えるスライムを従魔にし、あらゆる場所に放っています」
ここまで来たら、黙っておくこともできない。

どうせ、この二人と、シュレインの冒険者ギルドマスターのジニアス以外に、これを仕出かしたのが俺であると気づく者はいない。だったら言っておいた方がいいだろうと、俺は軽くそんな説明を加えた。

二人は息を呑んだ。

「百万……か。なかなかだな。F級が……最低階級が……事実だとするのなら、前代未聞もいいところだ」

「シンの情報収集能力の異常な高さも、それで説明が付く。なるほど。我々では敵わぬわけだ」

ファルスは慄き、レイン殿下はそう言って納得したように頷く。

だが、すぐにレイン殿下は次の話題を出した。

「……あれほどの大仕事があったあとで申し訳ないが、再び妨害と敵幹部の居場所の報告、そして、可能であれば幹部の始末を。まだ、時間が欲しい。話は以上だ」

「分かりました。では」

そう言って、俺はスライムとの〝繋がり〟を切った。

◇　◇　◇

時を少し遡る――

「……馬鹿な。ニーズヘッグが消滅した……？」

〝祭壇〟の前で、続々と届けられるようになった素材を活用して、着々と準備を進めていたノワールは、召喚魔法で従魔にしたニーズヘッグが消滅したことを知り、戦慄の表情を浮かべた。

当然だ。ニーズヘッグの理不尽さは、実際に戦ったことがあるから分かっている。

だからこそ、ニーズヘッグは六百年前から更に力をつけた今の自分ですら、相当の覚悟を持って挑まねば殺せないと知っていた。

故の戦慄。

すると――

「報告に参りました。我が〝主〟」

ニーズヘッグを召喚した際に一度戻ってきたが、それ以降はずっと外で活動していた残る三人の幹部が、やってきた。

「戻ってこられたか」

「はい。王国側の監視が随分と厳しくなっておりまして、報告が遅れてしまったこと、お詫び申し上げます」

そう言って、頭を深く下げるグーラたち三人の幹部に、ノワールは「謝る必要はない」と言って、頭を上げさせた。

「それで、報告は？　俺が召喚したニーズヘッグはどうなった？」

ノワールが最も知りたいこと。それに対し、グーラは申し訳なさげに口を開いた。

「申し訳ありません。ニーズヘッグに意識を向けていませんでした……ですが、死体に大量のスラ

イムが群がっているのが確認できました。もしかしたら、何か関係があるのかもしれません」
「そうか……」
ニーズヘッグは文字通り厄災――理不尽の権化だ。殺されるだなんて、自分でも考えなかった。なら、三人が考えなくても仕方ないと、ノワールは割り切る。
だが、続けて紡がれた〝死体に大量のスライムが群がっている〟という言葉に、ノワールは引っかかりを覚えた。
（スライム、スライム……どこかで見たような……？）
だが、一向に出てこない。どうでもいいことだったのだろうか？
「……まあ、いい。そこまで隠す必要もなくなり、なりふり構わず物資を集めたお陰で、目標まであと少しとなった。これが発動すれば、どうなろうが俺の勝ちだ」
そう言って、ノワールは魔法陣が回る〝祭壇〟と、幹部を見やる。
「……ふぅ。ああ、話が脱線してすまない。それで、他に報告は？」
ノワールは自分の世界に入ってしまっていたことに気づき、幹部たちに水を向けた。
「はっ。王国側もこちらの物資搬入をより一層潰しに来ていますが、計画に支障はありません。ですが、邪魔ですのでそろそろ魔物をぶつけて足止めをしようかと考えております。報告は以上です」
「そうか。では、引き続き頼んだぞ」
「「「はっ」」」

立ち読みサンプル
はここまで

三人はネイアの転移魔法で、姿を消した。
ややあって、一人残るノワールは、天を見上げる。
「あと少しだ。女神エリアス」
その言葉は、闇へと吸い込まれていった。

◇　◇　◇

目を覚まし、レイン殿下と話をしてからすぐのこと。
俺――シンは引き続き、祝福なき理想郷の物資搬入の妨害を開始していた。
「……よし。あとは転移で――」
木箱を持ちながら、そう言って転移の魔法石を砕こうとする構成員たち。
「させないよ」
それに対し、俺はそれぞれにスライムをひっつけさせると、様々な攻撃魔法の魔法石を砕く。
「がはっ……」
「ぐあああっ!!」
「ぎゃああ！！！」
闇走、爆炎、雷撃。
花火のような色とりどりの光が、彼らの命諸共物資を飲み込んでいく。